

書 評

蜂矢 英彦 著

心の病と社会復帰

上田 敏 (帝京大学市原病院)

この本の第一章は地下鉄の駅から著者が勤務する精神病院までの、花の豊かな遊歩道を5分ほど歩くという、映画の出だしのような軽快なテンポではじまる。そこですれちがう鈴木さん、山口さん、斉藤さん、高橋さん等々という、何人もの著者の知り合いがさりげなく紹介される。この人たちがみな開放病棟に入院中か、退院してアパートでひとり住いをしながら何らかの仕事に出勤していく、「心の病」からの立ち直りの過程にある人たちなのである。

このように小説のようにはじめた本書はさまざまな人生を紹介しながら「心の病は誰にでもおこる」(第1章)こと、「さまざまな心の病」(第2章)があることをわかりやすく紹介してくれる。そして「心の病はどこまで治るか」を群馬大精神科の「生活臨床グループ」の長期追跡調査から示し、精神分裂病者の半数は一応治るが4分の1は治すことができず、その中間に20年たっても病状が動揺する人たちがいること、しかも今後の治療環境の改善で「治らない」とされている4分の1の患者は近い将来半分に減らすことができるだろうとの見通しを示す。

ではどうすればもっと治せるようになるのか、そこで著者は自分史に沿いつつ、「精神病院における活動」(第4章)で作業療法、ナイトホスピタル、デイホスピタルなどを、「社会復帰の専門施設」(第5章)で創立以来16年を過ぎた都立世田谷リハビリテーションセンターでの精神科リハビリテーションの実際と効果、そして問題点を述べ、「18年ぶりの精神病院で」(第7章)で、定年退職に伴って移った旧態依然たる民間精神病院を改革して短期入院病棟を作ったり、社会復帰病棟を活性化させたり、地域に開かれた精神保健活動へと発展させていく活動を紹介し、「地域社会で生きる」(第8章)精神障害者の群像が紹介される。

面白くて読み出したらやめられない本であり、精神科リハビリテーションへの最良の入門書であり、身体障害者の問題を考えるうえでも必読の書といつてよいであろう。

(新書版 210頁 580円(税込) 1993 岩波書店刊)